

『三言』に見られる馮夢龍の思想における両面性——

『三言』における女性の“貞節”を中心に

張 軼 欧

A study on Ambivalence in Feng Meng-long's Thought

— Basing on the Women's Virtue in San Yan —

ZHANG Yi-ou

要 旨

明代の短篇白話小説集《三言》中描写了许多违背封建礼教，自由地追求爱情的女性。这些女性中除了未婚的年轻女子以外，也包括一些寡妇和小妾。这些女性不仅积极地追求自己倾心的男性，而且在正式结婚前同男性情交的情况也有。《三言》的编辑者冯梦龙对这些同封建礼教格格不入的女性持赞美的态度。但同时，在《三言》中，冯梦龙对那些严守封建礼教，婚姻生活中信奉“从一而终”的女性也持赞美的态度。为什么两种不同的价值观能同时被冯梦龙所认同呢？通过考察发现，在冯梦龙的思想体系中封建礼教的价值观一直存在并在潜意识地左右着他的行为和思想。同时，明末经济的发展，市民队伍的壮大，以及阳明学派的影响又使冯梦龙产生了同封建礼教相违背“爱情至上观”。以往的研究经常说冯梦龙是反封建的文学家。这种说法未免有些片面。冯梦龙的思想体系中既有反封建的一面，又有维护封建礼教的一面。这两种矛盾的价值观的同时集于一身，形成了冯梦龙作为明末士人的一个重要特征。

明代の白話小説集『三言』では、封建禮教に背いて、大胆に愛情を追い求める女性がたくさん描かれている。これらの女性の中には、年頃の女性だけでなく未亡人や妾たちも含まれる。彼女たちは自分で結婚相手を見つけただけでなく、結婚前に相手と情交に至ったケースも少なくない。いずれにしても、『三言』の編者である馮夢龍は彼女たちの行為を賛美しており、そこには批判的論調は見られない。こうした点も踏まえ、従来の研究では、馮夢龍は反封建主義的の文学家であるという結論に至っている。一方で、『三言』では、“二夫にまみ

平成17年2月28日 原稿受理

大阪産業大学 教養部非常勤講師

えず（従一而終）”という規範を守った、封建禮教の象徴のような女性も登場しており、馮夢龍は彼女たちを前者の女性たちと同様に賞賛している。そこで当然、疑問が生じる。何故編者は対照的ともいえる女性たちを同時に認めることができたのか。同じ作品集で矛盾している論調で扱っている背景には、やはり何がしかの基準があるはずである。この問題を考察するために、小論では、まず『三言』における“貞節”に関する物語に注目して見ることにする。

一．“貞節”の概念

『三言』には女性の“貞節”に関する物語はかなり多い。それらの物語を考察すると、“貞節”は、“二夫にまみえず（従一而終）”と同じ意味を持っていることが分かる。では、“貞節”とはそもそもどういう意味を持っているのであろうか。ここでは、まず、この“貞節”の概念について考察してみたい。

“貞”という文字が歴史的に確認されたのは甲骨文が最初である。初期の“貞”の意味を『説文解字』では次のように説明している。“貞，ト問也（貞，占いである）。”すなわち，“貞”の元々の意味は占うという意味である。占うという意味以外に、秦以前の文献では以下の意味も示されている¹⁾。

- 一、『易』卦の下の三爻。
- 二、女性が婚約してないこと。
- 三、正しいさま。
- 四、意志がしっかりしており、動揺していないこと。

ここで見られるように、これらの意味のほとんどは男女の性別を意識したものではない。

次に“節”についても見てみる。『説文解字』では、“節，竹約也（節，竹のふしである）”と説明されている。そこから節操，氣骨という意味に派生した。“貞”と“節”は、最初の意味は，“義”，“信”，“孝”，“仁”などと同様，男女によらず通用し，倫理道德の一用語として用いられ，婚姻とはあまり関係がなかった。“貞”と“節”が合わさった“貞節”という言葉は，元々は節操を固く守って屈服しないという意味であった。例えば，劉向の『九歎・逢紛』に書いた“原受命于貞節兮”（そもそも節操をもって命を受ける），張衡の“慕古人之貞節（古人の節操を慕う）²⁾”，そして『宋書・孟懷玉伝』における孟懷玉に対する“宜蒙甄表，以顯貞節（彼の節操を広く知らせるためにも彼を表彰するべきだ）”という評価などからも“貞節”の意味が現代のそれとは異なることが読み取れる。

1) 章義和 陳春雷，『貞節史』（上海文藝出版社 1999年11月 p 34と p 39）

2) 「思玄賦」（『文選集部』卷十五。）

しかし、私有制、父権制の確立と共に、社会は女性に“貞”を求めるようになった。父権の本質は男性の血統で一族の成員を決めることにあるので、一族血統の純潔性を保つためにも女性の貞操が大前提となる。時代の流れと共に、女性に対する貞操の要求が一段と厳しくなり、“貞”の解釈は結婚前の段階にまで拡大され、婚前の女性が純潔を守ることが当然とされた。「節」は結婚後の女性に求められる“従一而終”という規範と結びつき、夫の死後、再婚しないこと³⁾という解釈がなされるようになった。磐石な父権制が確立されていく中で、貞を求められる対象が女性に限定されていき、“貞節”の意味も、女性は再婚せず、貞操を失わないことを指すようになった。社会が女性に対して厳しく迫ったことで、“貞節”の本来の意味（節操を固く守る）は廃れてしまった。つまり、“貞節”を一言で言い換えれば“従一而終”である。そこで次節では、『三言』における“従一而終”を貫いた女性について考察する。

二、『三言』における、“従一而終”を貫いた女性

『三言』には婚前貞操を守り、また、結婚後“従一而終”を貫いた15人の女性が登場している。15人の名前を列挙しておく。阿秀（「喻世明言」巻2、以下では「喻」2と表記する）、陳玉蘭（「喻」4）、張如春（「喻」20）、金玉奴（「喻」27）、黃善聡（「喻」28）、関盼盼（「警世通言」10）、鄭氏（「警」11）、順哥（「警」12）、六瑛（「警」16）、劉宜春（「警」24）、潮音（「醒世恒言」6）、多福（「醒」巻9）、方氏（「醒」17）、白娟娟（「醒」25）、蔡瑞虹（「醒」36）。

表面的にみれば、彼女たちには“従一而終”という点で共通しているが、詳細を見てゆけば、彼女たちが“従一而終”を貫いた理由は異なる。その背景をより詳しく考察するために、小論では、彼女たちが“貞節”あるいは“従一而終”を守った理由に着目し、次の二種類に分類した。A：相手への深い愛情を拠り所とした“従一而終”。B：禮教への崇拝を拠り所とした“従一而終”。

A：相手への深い愛情を拠り所とした“従一而終”。

このパターンに属しているのは、陳玉蘭、張如春、関盼盼、鄭氏、順哥、劉宜春、白娟娟などである。陳玉蘭以外の女性は、相手と正式に結婚している。しかし、陳玉蘭のような未婚の身であろうと、結婚した他の女性たちであろうと、相手の男性を深く愛している点は変わらない。陳玉蘭の物語は次のようである。

3) 曹大為、「中国歴史“貞節”觀念的變遷」（『中国史研究』1991年第二期 中国社会科学院歴史研究所 p140。）

陳太尉の娘陳玉蘭は、向かいに住む商人の息子阮三郎が吹く蕭の音に心を惹かれた。その後、召し使いを通じて、自分の指輪を彼に渡した。彼女は、その指輪を証しに、阮三郎を密かに家に招いたが、父が帰宅したため密会は失敗に終わった。それ以後、阮三郎は恋の病にとりつかれるようになる。友人の張遠が、陳家に出入りしている閒雲庵の王尼姑と計って、閒雲庵で二人の密会を実現させたが、病で体が衰えていた阮三郎は、玉蘭の胸に抱かれたまま死んでしまった。このとき玉蘭が宿した子は、後に十九歳で狀元及第になる。玉蘭は阮家の嫁として身を守り続け、生涯再婚しなかった。

以上が物語の概略であるが、陳玉蘭と阮三郎は相思相愛の仲にも関わらず、運に恵まれず結婚できなかった。阮三郎は亡くなったが、彼に対する陳玉蘭の愛は消えることはなかった。彼女は阮三郎の子を宿したことを知ると、次のように母親に言った。“莫若等待十個月滿足，有得一男半女，也不絕了阮三後代，也是当日相愛情分（十ヶ月を待って子供を産むことは、阮三のために子孫を残すことでもあり、その時二人が愛し合ったことの証でもある）。”愛している男性のために子孫を残すという考え方は、鄭氏も陳玉蘭と同様である。鄭氏は夫と仕事先に赴任している途中、夫が悪人に川に投げ込まれ、自らも悪人に拉致された。その時、彼女は妊娠しており、夫の子供を残すため、どれだけ辛い目にあっても、自殺せず生き延びた。

他の結婚した女性たちの物語に目を向けると、それらの女性たちは結婚後、夫婦の円満な生活が描かれている。張如春は結婚後、“夫妻二人，如魚似水，且是說得着，不願同日生，只願同日死（夫婦二人，魚が水を得たように仲がよい。気もよく合い、生まれは別とは言え、一緒に死ぬことだけを願っている）。”順哥と範希周の結婚の場合、最初順哥が迫られて彼と結婚したが、結婚後は一転して“夫妻和順，相敬如賓（夫妻は仲がよく、お互いに賓客のように尊敬しあう）”のようになった。関盼盼は元々妓女であるが、張建樹の寵愛を得て、張建樹が彼女のためにつくった“燕子樓”に二人で住んだ。その仲睦まじい姿が次のように描かれている。“綺窓歌和，指花月為題，繡閣論情，對松筠為誓。歌笑管弦，情愛方濃（花や月を題として、窓に寄り添って歌を唄い、繡閣に情を論じ、松や竹に向って誓い合う。歌ったり笑ったり、愛情が深い）。”劉宜春の場合、結婚相手（宋金）は親により決められていた。しかし、二人は二年間一緒に働いた仲であり、互いのことをよく知っていたので、親から縁談の話を持ちかけられたとき、彼女は文句も言わず、宋金と結婚した。二人の結婚後の様子は、“夫妻恩愛，自不必說（夫妻は恩愛し、言うまでもない）”と綴られている。白娟娟は進士の独孤退叔と結婚した後、独孤退叔は彼女の節操を尊敬し、彼女の才能に感服し、そして彼女の容姿端麗なところも大変気に入っていた。まさしく“真個夫婦相得，如魚似水（本当に夫婦が愛し合っており、魚が水を得たように仲がよい）”という状態であった。

以上に述べたように、彼女たちと相手との間の深い愛の繋がりの下では、相手の男性に何が起ころうとも、それが生き別れ、死別に関わらず、彼女たちが再婚しない行為は、例え現代に生きている我々であっても、少しも違和感を感じない。何故ならば、時代が変わろうとも、本当の愛情に一番求められる重要な点は、その情の純潔さだからである。自分が生涯愛した人（例え相手が亡くなっても）のために“貞節”を守るのは愛情の最高の境地である。女性が社会活動に参加できない時代では、女性は稼ぐことができず、一生涯一人で暮らすのは決して容易なことではないが、それでも、再婚しないのはやはり相手に対する本当の愛情があるからであろう。誰も彼女たちに“貞節を守りなさい”と命令した訳ではなく、逆に周囲の人（ほとんどは両親）が彼女たちに再婚を勧めたほどである。しかし、彼女たちは、強い口調で再婚は絶対にありえないと宣言している。張如春は申陽公（化け物）に結婚を迫られた時、次のように言った。“古云烈女不更二夫，奴今寧死而不受辱（古い言葉では、烈女は二夫に仕えないと言う。私は今、たとえ死んでも、このような侮辱を受けない）。”順哥が両親に再婚を勧められた時、彼女は“若必欲孩児改嫁，不如容孩児自尽，不失為完節之婦（もしどうしても私を再婚させるなら、私を自殺させたほうがいい。そうすれば、“貞節”を守った婦人と言うことができる）”と言った。彼女と同様、劉宜春も“你両口児合計害了我丈夫，又不容我帶孝，無非要我改嫁他人。我豈肯失節，以負宋郎？寧可帶孝而死，決不除孝而生（貴方たち二人は私の夫を殺し、また彼の喪に服させてくれないのは私を再婚させたいからでしょう。私はどうして節を失い、宋郎を裏切ることができるのでしょうか？私は喪に服せずに生きるよりは、喪に服して死んだほうがいい）”と言って、親に抗議した。

前述したように、彼女たちの“烈女不更二夫”，“完節之婦”，“豈肯失節”などの言葉からみれば、みな禮教に従っているように見える。しかし実際のところは、これらの言葉はみな自分の愛情を守る武器として用いられている。彼女たちは禮教の教えをうまく利用して、父権や悪人と闘った。その結果、彼女たちの再婚を拒否した行為は、夫と再会し、幸せな生活を送るという形でみな報われた。馮夢龍は彼女たちの行為を評価し、その行為から“世儒但知理為情之範，孰知情為理之維乎⁴⁾（世の中の士人たちはただ“理”は“情”の規範であることだけのみを知り，“情”が“理”を維持するしていることを知らない）”という彼なりの“情”と“理”の関係概念を示した。Aタイプに属している彼女たちが再婚せず，“従一而終”を貫いている理由は“理”を維持するためではなく、自分の愛情のためである。しかし、その結果だけを見れば、その行為は封建禮教と一致しているかに見えるのである。

4) 馮夢龍「情貞類・朱葵」（『情史』 岳麓書社 1986年9月 p37。）

B：禮教への崇拜を拠り所とした“従一而終”。

前述とは異なり、このタイプの女性は情というより、禮教（理）を拠り所にして“貞節”を守るタイプである。名前を列举すると、阿秀、金玉奴、黄善聡、六瑛、潮音、多福、方氏、蔡瑞虹などが挙げられる。彼女たちが“貞節”を守るために取った行動は、自殺したり、たとえ相手の男性に裏切られても離縁しなかったり、相手の男性の状況が変わろうとも彼との結婚に固執したりと、様々である。

このタイプに属している殆どの女性は、婚約した男性や結婚相手に対して、禮教に従って“従一而終”を貫いた。ただ一人黄善聡という女性だけが例外であった。

黄善聡は線香販売の行商黄老実の二番目の娘である。彼女は十二歳の時、母を亡くした。黄老実は彼女を男装させて、自分の甥ということにして彼女を連れて行商の旅に出た。二年後、黄老実はなくなり、一人となった黄善聡は同宿で隣室の商人李秀卿と義兄弟となり、共同で商売を始めることになった。二人で七年間一緒に生活し、彼女は自分が女であることを上手に隠し通した。その後、彼女は李秀卿の協力で、父の棺を故郷に運んで埋葬した。彼女は姉と再会し、姉の家で元の姿に戻った。彼女の姉の家を訪ねて来た李秀卿はその時、やっと黄善聡が女性であることが分かり、驚くとともに、彼女に求婚した。しかし、黄善聡は二人で何年間一緒に住んでいたのも、世間の目を気にして彼からの求婚を断わった。経緯を知った守備太監李公は、黄善聡を自分の甥の嫁として娶りたいと彼女に縁談を持ちかけた。結婚した当日、黄善聡はその甥が李秀卿であることを知った。つまりこれは、太監李公の仕業だったのである。

彼女は男装して、李秀卿という男性と同じ部屋で七年間同居していた。李秀卿は彼女が女性であることを知ってから、すぐ媒酌人を通して彼女に縁談を持ち掛けた。しかし、彼女はその縁談を断わった。李秀卿のことを嫌っていた訳ではない。彼女はその理由を次のように説明している。“嫌疑之際，不可不謹。今日若与配合，無私有私，把七年“貞節”，一旦付之東流，岂不惹人嘲笑（疑いを避けるためには慎まなければならない。今もし彼と婚約したら、やましいことがあろうとなかろうと、七年間守っていた“貞節”を失ってしまい、みなに笑われるからです）！”そして、彼女は嫌疑を避けるために、自分と李秀卿の間の情を犠牲にして、全く知らない男性と結婚しようとした。こうした行為を見れば、彼女にとって、禮教がいかに重要であったか、一目瞭然である。

『三言』には“貞節”を守るために、阿秀と蔡瑞虹のように自殺する例もある。

江西の贛州の石城県に魯廉憲と顧險事という二人の官僚がいた。魯の息子の学曾と顧の娘の阿秀は許婚であった。魯廉憲が死んでから、魯の家族は大変貧乏になり、阿秀の父の顧險事はその婚約を取り消そうと思ったが、阿秀は反対した。阿秀の母はやむなく、密かに魯を

援助することにした。学曾には阿秀の家を訪問するための服がないので従兄弟の梁尚賓の所へ借りに行った。梁は学曾からいきさつを聞き、理由をつけて学曾を自分の家に泊まらせ、彼が阿秀の家に行った。阿秀と母は彼が偽者であるとは知らずに、梁尚賓に金を渡し、また、阿秀は彼と一夜の夫婦になってしまった。三日後、本当の婚約者の学曾が阿秀の前に現れ、そこで阿秀は梁に騙されたということを知り、その場で自殺した。顧險事は娘の復讐のため、学曾を訴えた。結局、陳御史の調べにより真犯人である梁尚賓が処罰された。

阿秀の婚約は、親に決められたものである。しかし、父にその婚約を取り消されると聞いた阿秀は必死に父に抵抗した。父親に対して、彼女はまず“婦人之義、従一而終（婦人の義は従一而終である）”と言い、そして“若魯家貧不能聘、孩児情願守志終身、決不改適（もし、魯の家が貧しくて結納金を出せなかったら、私は志を守って一生独身を通し、他へ嫁ぎません）”と言った。しかし、彼女は梁尚賓に騙された後、自殺した。その理由は“以完貞性（貞を守る）”ためである。彼女に対して、今西凱夫氏が論文（「従一而終」-『三言』における士大夫の恋）⁵⁾で次のように述べている。彼女は“倫理を実践していたのではない。だから恋が父親の手によって奪い去られようとした時、彼女は據ることのできる唯一の徳目をかざして、必死に抵抗したのである。”しかし、彼女が守ったものは果たして恋と言えるだろうか。顔も見たことがない人に対して恋心が芽生えるとは思えない。やはり禮教（理）に依拠した行為としか考えられない。

“貞節”を守るために蔡瑞虹も自殺している。彼女の家族は悪人に殺された後、彼女自身も悪人に暴行され、遊郭に売られた。その後、胡悦という男性に買われて、彼の妾になり、さらに、彼に売られて、朱源の妾になった。彼女は朱源と結婚後、“彼此相敬相愛、如魚似水（お互いに相思相愛で、まるで魚が水を得たような感じである）”と描写されている。しかし、家族の仇を討った後、彼女は自殺した。彼女が朱源に残した遺書には次のように記されていた。“男徳在義、女徳在節、女而不節、行禽何別。……。失節貪生、貽玷閭閻、妾且就死、以謝蔡氏之宗于地下（男の徳は“義”にあり、女の徳は“節”にある。女性であって、“節”がなかったら、禽獣と同じだ。……。 “節”を失って生きるのは祖先を汚すことになる。今から私は死んで、あの世で蔡氏の祖先に謝る）。”これで分かるように、彼女が最初から最後まで強調しているには“貞節”である。彼女は朱源と結婚するまでもに幾度か暴行を受けたが、それでも自殺しなかった。その原因は、家族の仇を討ってなかったからである。朱源と結婚して、二人は相思相愛であり、子供まで儲けていた。家族の仇を討った後、彼女は再

5) 今西凱夫 「従一而終—『三言』における士大夫の恋」（『中国学論集』沼尻博士退休記念
1990 汲古書院 p 331。）

び“貞節”に拠り、愛する夫と子供を捨てて自殺した。彼女にとって一番重要なのは、“家族の仇”，それから“貞節”である。“愛情”というものは、彼女の中では重要ではない。彼女の遺書に書かれた“一人之廉恥小，閨門之仇怨大（個人の恥は小さく，家族の仇は大きい）”という言葉には、彼女の価値観と道徳観が明らかに表している。この道徳観は儒教と一致している。儒教が主張しているのは、第一に国，家族の利益，そして個人の利益である。個人は国や，家族のために尽くすべきだと主張している。

蔡瑞虹は朱源の間に愛情があったけれども，彼女は“貞節”のためその情を捨てた。彼女と違い，多福，六瑛，潮音，方氏，金玉奴は相手の男性との間に愛情が芽生えていない段階，あるいはすでに愛情が冷め切った時でも，“貞節”のために“従一而終”を貫いた。

多福の物語を要約すると以下ようになる。多福は朱世遠の娘である。彼女の親の友達である陳青には息子の陳多寿がいた。双方の親は彼らを許婚にした。しかし，陳多寿が十五才の時，にわかに癩という病気にかかった。はじめはただ疥癬ぐらいに考えていたが，一年経つと病状は悪化し，顔も変形し，体臭もきつくなり，近寄れるものではなかった。その後，さらに三年経っても多寿の病気は治らなかったで，陳青は多福の立場を考えて，婚約を取り消したいと考え始めた。朱多福の両親はそれで喜んだが，多福は承諾しなかった。その後，さらに三年が経った。今度は多寿が婚約取消しの詩を書いて，多福に渡した。彼女はその詩を読んで，自縊しようとしたが，両親に引き止められた。彼女の両親は彼女の意志の強さを知り，二人を結婚させた。結婚後，二人は懸命に闘病生活に挑んだものの，三年後，闘病生活に疲れた二人は砒素を飲んで自殺しようとした。幸いなことに，二人とも助けられた。その上，毒をもって毒を制すという言葉があるように，多寿はその砒素のおかげで病気は治癒し，その後，彼はあらためて勉強を始め，三十四才の時科挙試験に合格し，二人は以後幸せな生活を送った。

多福は最終的には幸せになったが，最初面識もなく，重病にかかっている，いつ死ぬとも知れない陳多寿と結婚しようという強い意志は，どう考えても違和感を禁じえない。彼女は何のために陳多寿と結婚したのか。愛情のためではないはずである。なぜならば，結婚するまで名前しか知らない間柄の場合では，二人の間には愛情が芽生えているはずがないからである。彼女が婚約取り消しを承諾しなかった理由は，ただ“従没見好人家女子喫両家茶（よい家の女性は一家の茶を飲むのをみたことがない）”，“從來婦道当従一（従来婦人の道は従一すべきだ）”という点である。彼女にとっては，多寿と結婚できなかつたら，むしろ死んだほうがよい。死ねば，自分は“完名全節（名，節などを保つこと）”ができるからである。その時，彼女が考えていたのは禮教が提唱していた“貞女”“節婦”という虚名であり，自分の幸せなどではない。彼女はまさしく“貞節”のために生き，“貞節”のために死ぬこと

を貫いた女性であった。

多福と同じように、潮音も小さい頃、勤自励という男性の許婚になった。勤自励が軍に投じて十年間音信が全くなかったが、潮音はずっと彼を待ち続け、最後に彼と結婚した。潮音は勤自励と結婚するまでに、多福と同じように勤自励の顔さえも見たことがない。勤自励は軍に投じて消息がまったくなく、六年の月日が流れると、勤自励の両親や、潮音の両親は婚約を取り消してもいいと思うようになった。特に、潮音の両親は娘の幸せのために、彼女に勤自励が亡くなったという嘘をついた。しかし、彼女は“一女不喫両家茶（女は二家のお茶を飲まず）”という理由で、彼の喪に服した。三年経ち、両親に他の男性との縁談を勧められた時、やはり多福のように自殺を仄めかして親に抵抗した。しかし、当時、彼女のような再婚しない行為はあまり意味がなかった。彼女の母親が言ったように、“未過門的媳婦，守節也是虛名（嫁ぎ先に入っていない嫁は、たとえ“節”を守っても、ただの虚名である）。”彼女の両親も彼女の行為を理解できなかった。彼女の父親は娘と勤自励とは顔も合わせたことがないのに、勤自励のために節を守る必要はないと主張した。次に、彼女の母親は、彼女が他の人と結婚しなかったら、両親が老後頼れる人がいないので、親孝行のために、亡くなった人のことを忘れ再婚して欲しいと説得を試みた。しかし、彼女の意志は強く、まるで“一人立志，万夫莫奪（一人が志を決めたら、万人はそれを奪うことはできない）”のようであった。しかし、彼女が必死に守っていたのはやはり“守節”という“虚名”である。彼女は多福と同様、このような“虚名”に自己満足していたのである。

六瑛の物語は、前半は潮音と概ね同じである。婚約相手の馬徳称は立身出世するために、故郷を離れ、上京した。噂により、彼は上京の途中、洪水に遇って亡くなった。六瑛の兄は彼女を別のひとと婚約させようとしたが、彼女は“以死自誓，決不二夫（死で以って誓い、決して二夫とせず）”。しかし、六瑛の兄が亡くなってから、六瑛は人を使って、馬徳称が本当に亡くなったかどうかを調べてもらった。馬徳称がまだ生きていと知り、彼女は彼を探しに行った。彼女は馬徳称を見つけ、彼を援助した結果、彼は科挙試験に合格し、二人はめでたく結ばれた。

この物語における六瑛は、家を出て、婚約者を捜す旅に出たり、彼に援助したりしたが、彼女も多福や潮音と同様、結婚前に相手と会ったことがない。彼女の“守節”は無理強いのを禁じえないが、多福、潮音の物語と性質はあまり変わらない。

多福、潮音、及び六瑛の婚約相手は、常識的にみて結婚可能な条件が揃っていない（一人は悪疾でいつ死んでもおかしくない状態、ほかの二人は生きているかどうかさえ分からない状態）が、人格に関する問題はなかった。一方、方氏、金玉奴の相手は道徳的に悪人に位置付けられるのにも関わらず、彼女たちが“従一而終”を貫いたのはさらに奇異に感じる。

方氏の婚約相手は金持ち過善の子過迂である。彼は飲む、打つ、女好きの三拍子が揃った筋金入りの放蕩者だった。結婚前、父親は彼を親戚の家で勉強しに行かせたが、彼はいつも嘘をつき、勉強をさぼって毎日遊んでばかりいた。彼は遊ぶ金欲しさに、父親の金を盗んでいた。彼は方氏と結婚後、しばらく真面目になったが、やはり本性は改めにくく、再び放蕩な生活を送り出した。遊びの金を捻出するため、まず、方氏の嫁入り道具を盗み売り、その後、父親の畑も売った。それが父親にばれた後、罰を避けるために、彼は逃げ出した。過善は自分の息子の行為で方氏に迷惑をかけ、申し訳ないと思って、彼女に弁償を申し出て、方氏の将来のためにも離縁を勧めた。しかし、彼女は次のように言った。“妾聞婦人之義、従一而終。夫死而嫁、志者恥為。何況妾夫尚在、豈可為此狗彘之事（私は婦人の義は従一而終であると聞いている。夫が亡くなって再婚するのは、志があるものはそれを恥かしいと思う。私の夫はまた生きているのに、このような畜生と同じ行為を決してすることができない）。”それを聞き、過善は“逆子総在、這等不肖、守之何益（彼は生きているけど、このような不肖の奴なのに、なんのために守るのか）”と言った。しかし、方氏は次のように言い返した。“妾夫雖不肖、妾志不可改。必欲奪妾之志、有死而已（夫は不肖であるが、私の志は変えられない。私の志を奪うとしたら、私は死ぬしか出来ない）。”二人の問答から分かるように、方氏も夫に人徳がないことが分かっている。彼女が“貞節”を守るのは、人徳がない夫のためではなく、自分のためである。そのような“貞節”を守る意味が一体どこにあるのかに関しては、彼女は少しも問題にはしていないのである。

方氏と比べて、金玉奴の“従一而終”はもっと常識と合わない。

金玉奴の物語を以下に要約する。金玉奴は金老大という団頭（乞食の頭目）の一人娘であった。かねがね土人に嫁がせようと望んでいたところ、太学生莫稽と話がまとまった。莫稽は両親に死なれて暮らしに困っていたので、玉奴の出自は気にいらなかったが、資産があったので承知したのである。結婚した後、玉奴は夫が出世するように、夫のために本を買ったり、先生を雇ったり、夫の評判を遠くまで広めたりして、三年後、莫稽はやっと科挙の試験に合格した。莫稽は出世すると、玉奴の家庭に対する不満がだんだん表面化し、結婚したことを後悔するようになった。ある日、船で赴任先に向う途中、莫稽は邪しmana気持ちを起こして玉奴を川に突き落とした。幸い玉奴は許徳厚に救われ、彼の養女となった。許徳厚は偶然にも莫稽の上司であった。許徳厚は自分の娘の婿ということで莫稽を迎え、二人を再婚させた。婚礼の夜、玉奴は人に頼んで莫稽を折檻した。莫稽は自分の非を深く悔い、玉奴に許しを乞うた。以後夫婦は、睦まじく幸せな生活を送った。

金玉奴は許徳厚に再婚を勧められた時、彼女は次のように言った。“奴家雖出寒門、頗知禮數。既与莫郎結發、従一而終。雖然莫郎嫌貧弃賤、忍心害理、奴家各尽其道、豈肯改嫁、

以傷婦節（私は貧しい家の出ですが、禮義はしっかりしている。莫郎と結婚した以上、彼に従うべきです。莫郎は没義道なことをしたが、私は婦道を尽くし、再婚という“節”を無くすことは決してできない。）しかし、再婚の相手が莫稽と分かると、彼女は再婚を承諾した。自分の恩を受けた人に殺されかけて、それに対して復讐せず、再度その人と結婚するのは大変理解しにくいことである。莫稽に突き落とされた後、彼女も莫稽には愛情がないということを知り、その上莫稽が道徳がない人だということも知った。それでも、彼女はただ“婦節”という虚名のために、自分を殺そうとした人間と又一緒に生活するようになった。方氏や、金玉奴にとっては、相手の男性は如何なる道義心がない人物でも、ひとたび彼と婚約し、結婚したら、“従一而終”を貫かねばならない。自分自身の幸せより、“名節”を重んじたのである。

以上に述べたように、Bタイプに属している全ての女性の経験は種々様々であるが、みな“貞節”を守るという観念、価値観においては一致している。彼女たちの生きる目的は、自分の幸せというより“貞節”を守るためである。しかし、彼女らにとって“貞婦”や“節婦”は虚名ではなく、彼女たちの人生の目標そのものであった。封建禮教が女性に対して提唱している“従一而終”、女性としての“貞節”を守るべきという観念は彼女たちにより最大限に発揮されている。

『三言』編集者の馮夢龍は、愛情のために、“従一而終”と言うAタイプの女性を賛美しているが、情のためではなく、時には“貞節”のため、そもそも存在している情も犠牲にするBタイプの女性の行為も同じように賛美した。そして、馮夢龍はBタイプに属している殆どの女性に対して、その“貞節”を必死に守った結果として、何らかの形で彼女たちに幸せな結末を与えている。例えば、方氏や、金玉奴の場合、彼女らの努力が報われるように、人徳がなかった過迂と莫稽の心を入れ替えさせ、それぞれの夫婦に円満な結末を与えた。そのここで分かるように、馮夢龍は“貞節”を守る行為を無原則的に認め、賛美しようとしているのである。

三. 馮夢龍が賞賛した“貞節”を守らない女性

前述したように、馮夢龍はすべての“貞節”を守る女性のことを受け入れ、賛美した。しかし、彼は“貞節”を守っていない女性に対して、すべて否定した訳ではない。『三言』では結婚前に、貞を守らず、男性と結ばれるケースがかなり多く、劉素香、李鶯鶯、賀秀娥などはその代表的な人物である。未亡人でありながら、節を守らず、積極的に男性を追い求めて再婚した例もある。柴夫人、卓文君はその例である。さらに、すでに結婚していて、節を守らず別の男性と付き合う物語もあり、霍員外の妾はその代表的な人物である。しかし、彼

女たちに対する批判はみられず、むしろ賞賛していると言ってよい。

劉素香、李鶯鶯、賀秀娥三人は、理のため情を放棄した黄善聡と比べて著しく対照的である。彼女たち三人はいずれも、出会った男性と結婚したが、正式に結婚する前に相手と情交に至っている。劉素香は相手の張舜美と出会った翌日、彼を自分の家に誘い、結ばれている。賀秀娥も劉素香と同様である。相手の呉彦と知り合った翌日の晩、密かに自分の船艙のドアを開け、呉彦を部屋に入れている。劉素香、賀秀娥と比べて、李鶯鶯の方は期間が一年と長いものの、やはり婚前交渉があった。彼女たちはいずれも七年間男性と同じ部屋に住んでいても、きちんと貞操を守っていた黄善聡とは比べる余地がない。『三言』では、劉素香、李鶯鶯、賀秀娥の物語をそれぞれ次のように評価している。“間別三年死復生、潤州城下念多情（三年間離別して、死から生き返り、潤州城の下に多情を抱く）”、“閑向書齋閱古今、生非草木豈無情。佳人才子多奇遇、難比張生遇鶯鶯（閑で書齋で古今を閲覧し、生きていることは草木ではないので誰でも情がある。佳人才子には奇遇が多いが、張生と鶯鶯の物語には比べられない）”、“百歲因縁床下就、麗情千古播詞場（百年の因縁は寢床に成就され、美しい愛情は永遠に歌われている）”。ここに見えるように、『三言』においては、“貞節”を守らぬ彼女たちの行為に対する馮夢龍の批判的論調は全く見られない。ここで馮夢龍が注目しているのは彼女たちの“情”である。彼女たちが“貞節”を守らず情欲に走った行為は、情を際立たせるものとして作用している。二人の愛情をさらに風情あるものにしている。

柴夫人、卓文君は未亡人である。禮教の“従一而終”という掟の下では、彼女たちが再婚することは許されないはずである。しかし、『三言』の中では、彼女たちはいずれも自分で再婚相手を決めて、再婚し、幸せになっている。柴夫人は相手を決めてから、媒酌を通して、結婚したが、卓文君の場合は、すぐに相手と駆け落ちしている。馮夢龍は彼女らを全く批判しないどころか、大変素晴らしい人物であると考えていた。彼が編纂した筆記小説『情史』には、卷四の「情俠類」、及び卷六の「情愛類」において、卓文君を高く評価している。卓文君は実在する人物であり、司馬相如との愛情物語で歴史に名を残している。馮夢龍もやはり彼女と司馬相如の愛情に注目している。彼は「情俠類」に二人の愛情を次のように評価している。“文君以身殉相如、相如亦以身殉文君、一琴一詠、已足千古（文君は自分の身で相如に殉じ、相如も自分の身で文君に殉じ、一つの琴、及び一つの詠で永遠にその名を残した）。”「情愛類」では、“必如相如之于文君直得一死（相如の文君を愛する行為は一死に値するほどである）”、すなわち、相如と文君が相思相愛ではなかったら、殉死も意味のないものと言うことになる。転じて、司馬相如と卓文君らが見せてくれる相手のために一生懸命に尽くす愛情は、人間にとって最も美しいものであり、“従一而終”を棚上げにして良いぐらいであると彼は考えている。

霍員外の妾の物語に着目してみる。彼女は主人がいながらにして、自分が好きな男性を捜し、その男性と駆け落ちした。つまり“従一而終”に背く女性である。主人からの愛情を一切感じるができなかったことが新たな男性を捜し始める理由であった。好きな男性を見つけ、二人が駆け落ちした後、“両情好合、偕老百年（両情がよく、白髪になるまで添い遂げる）”という幸せな形になっている。

以上に述べた女性たちは、みな“貞節”を守っていない女性ばかりである。彼女らの行為は反禮教的といわざるを得ないものであろう。結婚前に、男性と情交し、結婚後また“貞節”を守らず他の男性と駆け落ちするなどは、その時代ではいずれも処断されてしかるべきである。その証拠に、『三言』では似たような行為が行なわれ、罰を受けた女性は何人もいる。たとえば、情欲に溺れた「警世通言」巻38に描かれている蒋淑真、「醒世恒言」巻15に描かれている静真、空照などである。彼女たちは殺害されたり、逮捕されたり、自殺したりして、いずれも不幸の結末に終わっている。一方で、馮夢龍は劉素香、李鶯鶯、賀秀娥、柴夫人、卓文君、霍員外の妾に対する批判的見解は取らず、幸せな結末を用意している。彼女たちの身分はそれぞれ異なるが、共通している所がある。それは、彼女たちはいずれも真の愛情を積極的に追求めることであり、その上、その愛情は片思いではなく、お互いに相思相愛である点である。これらの条件が揃っている時、幸福な結末が与えられるのである。この部分に馮夢龍の“愛情至上”という観念が表出しているものと考えられる。

四. 馮夢龍の“愛情至上”主義

馮夢龍の“愛情至上主義”の理論的な根拠は、彼が編集した文言小説集『情史』に見つけることができる（『情史』の編集者が馮夢龍ではないという説もあるが、一般的に馮夢龍と考えられている。小論でも、馮夢龍が『情史』の編集者であるという立場を取る）。周知のように、馮夢龍は『情史』において“情教観”を主張した。“情教観”は馮夢龍の思想において大変重要な位置を占めている。馮夢龍の思想について研究の中で、彼の“情教観”に触れない者はいない。馮夢龍の“情教観”では、“情”で宇宙万物の存在を解釈している。彼は情の意義を次のように説明している。“天地若無情，不生一切物。一切物無情，不能環相生。生生而不滅，由情不滅故⁶⁾（天地に情がなければ，物は一切存在しない。世の中のものには情がなければ，永続しない。物が代々繁殖し絶滅しない理由は，すべてに情があるからである）。”この説明によると，馮夢龍は“情”こそ宇宙万物が生まれる根源であり，宇宙万物が生存し，永続する原動力であると考えている。彼の考えを借りれば，“情”がなければ，世

6) 馮夢龍「龍子猶序」(『情史』 岳麓書社 1986年9月 p1。)

間の一切のもの、即ち人間ですら存在することができないのである。

馮夢龍は『情史』において“情”を「情貞類」、「情縁類」、「情私類」、「情俠類」、「情豪類」、「情愛類」、「情痴類」、「情感類」、「情幻類」、「情靈類」、「情化類」、「情媒類」、「情憾類」、「情仇類」、「情芽類」、「情報類」、「情穢類」、「情累類」、「情疑類」、「情鬼類」、「情妖類」、「情外類」、「情通類」、「情迹類」などの二十四種類に分けている。“情”に関わる範囲は、人間、幽霊、馬、虎、魚などの動物、花、草、樹などの植物まで多様である。その“情”の内容も種々様々である。男女間の愛情、忠実、“貞節”、君臣の間の忠実、親に対しての孝、それに人間の友情、欲望、及び男性同士の間同性愛、そして、幽霊、妖怪などに関する奇怪な話などもある。

以上の分類から分かるように、馮夢龍が『情史』に述べた“情”は大変抽象的な概念で、一言では纏められない。しかし、馮夢龍が宇宙に存在している全ての情は、最初に男女の間の情から始まり（“情始於男女⁷⁾”）、それから世界に広がった（“于是流注于君臣，父子，兄弟，朋友之間而然有餘⁸⁾”）と考えている。男女の“情”は、すなわち男女の愛情である。前述したように、馮夢龍は“情”は宇宙万物が生まれる源泉であると考えている。しかも、この“情”は男女の愛情からである。言い換えれば、宇宙万物はすべて男女の愛情から始まったということになる。進化論によれば、宇宙万物は勿論男女の愛情から生まれたという訳ではない。進化論は十九世紀の半ば、ダーウィンが体系付けたことによって広く社会の注目を集め、以後、科学的学説として認知されている。現代の人々は、宇宙万物が男女の愛情から生まれたという観念を奇異に思うであろうが、ダーウィンよりほぼ二百年前の馮夢龍が進化論を知る由もない。馮夢龍は男女の愛情を何よりも重視している。『三言』の物語は“愛情至上主義”の結実と言って良いだろう。

『情史』に見られる“情”の概念が『三言』にどのような影響を与えたについては、『情史』と『三言』の編集年代についてどちらが早いかという問題についても触れなければならない。一般に、『情史』は『三言』より早いと考えられている。

『情史』の「情穢類・竇從一」という話に附された“評”には、次のような記述がある。“『譚概』評云：絶好一出醜浄劇文（『譚概』の評に曰く：一出の素晴らしい醜と浄の脚本である）。”また、「情外類・張浪狗」の後ろにも『譚概』の評を引用している。『譚概』は『古今譚概』のことであり、1620年『古今笑』という名前に変わっている⁹⁾。『情史』では『譚概』のことばかり書かれており、『古今笑』には一言も触れてない。これは、『情史』が『古今笑』の

7) 馮夢龍「詹詹外史序」（『情史』 岳麓書社 1986年9月 p 3。）

8) 馮夢龍「詹詹外史序」（『情史』 岳麓書社 1986年9月 p 3。）

9) 龔篤清『馮夢龍新論』（湖南人民出版社 2002年11月 p 486。）

前に出版されたことを示しているのではないだろうか。しかし、『三言』の中で最も早く出版されたのは『喻世明言』であり、その出版年は1621年である。故に、馮夢龍が『三言』を編集するとき、“愛情至上”主義はその素材選定の基準の一つとなっていると考えてよいだろう。

馮夢龍がその“愛情至上”主義で重視しているのは、片思いではなく、“相思相愛”の感情であり、そして、男女が真摯に愛情を追い求める点である。“愛情至上”主義によれば、男女の間に真の愛情さえあれば、その形式に拘る必要がなく、“父母の命、媒酌の言”の有無や、男女両方が未婚であるかどうかなどについてはさして重要ではない。真の愛情に基づいているのであれば、例え結婚前であれ情交に至っても構わないし、女性がすでに結婚しても、本当に愛している人を追い求めることもできる。また愛し合っている男女が駆け落ちしても構わない。故に、『三言』には男女の愛情を描いた物語がもっとも多く、積極的に自分の愛情を求めている女性が最も活き活きと描かれている。禮教が提唱した“貞節”、“從一而終”などを守ってなくても、批判を受けず、かえって賞賛されている。前述したように、劉素香、李鶯鶯、賀秀娥、柴夫人、卓文君、霍員外の妾などはいずれも、禮教の教えに背いた女性たちである。しかし、馮夢龍は“愛情至上”主義で彼女たちの行為を判断している。彼女たちの真の愛情を追い求める姿は馮夢龍を感動させた。馮夢龍は彼女たちの愛情を追い求める真摯な姿に注目しているため、反禮教的側面に焦点を当てていないのである。

『三言』が出版される前、『清平山堂話本』という短編白話小説集があった。この小説には卓文君の物語が収録されており、『三言』における卓文君の物語はそれに基づいて編集した可能性がかなり高いと考えられている。

『清平山堂話本』は洪楗によって編集された。『清平山堂話本』と『三言』における卓文君の物語の粗筋はほぼ同じであるが、卓文君の身分に関して相違点が多い。『清平山堂話本』では、卓文君は年頃の娘という身分であるが、『三言』では未亡人になっている。『清平山堂話本』に基づいて編集した以上、卓文君の身分をそのまま受け継いでも構わないはずである。さらに推し進めて言えば、未亡人、既婚の女性という設定をわざと年頃の娘に変えないのは、“愛情至上”が、無原則の真の愛情と考えているからであろう。

馮夢龍のこの“愛情至上”主義の形成は、明の半ば以後、一般市民階層が拡大し、彼らが抱いた思想が広く浸透したことと関係があるのではないだろうか。その上、自らの経験、そして明の半ば以後の哲学思潮、特に李贄などの陽明学の泰州学派の影響を受けていたこともその一因であろう。馮夢龍自らの経験についても触れておこう。彼は士人であるが、市民階層とも密接な関係があった。彼は『山歌』の素材を収集する際、あちこちへ足を運び、いろいろな人と接触し、市民階層の思想を直に感じとり、受容したものと思われる。彼は若い頃、

よく遊郭へ遊びに行き、妓女の友達もたくさん作った。妓女たちも彼に『山歌』の素材の提供した。さらに、馮夢龍の心に残る恋も妓女との間で生まれたものである。彼が愛した妓女は侯慧卿という名の女性である。しかし、二人の恋は実らなかった。侯慧卿がある金持ちの商人と結婚したことで二人の恋は終わってしまった。この衝撃は馮夢龍の後の人生に強く影響を与えた。このような経験を通して、彼は女性、特に妓女に対して平等な観念を持つようになった。彼は世間一般的な目で妓女を見ていない。周知のように、彼はまた李贄の思想を受け入れている。彼は“酷嗜李氏之学，奉為著蔡¹⁰⁾”（李氏の学を大変好み、自分の行動の指針として考えている）とした。馮夢龍が編纂した『智囊』『情史』『古今譚概』『太平広記鈔』には李贄の言葉も多く引用されている。馮夢龍がこれらの影響で、自分なりの“愛情至上”主義を作り上げたのである。

五. 馮夢龍の儒教観

従来の馮夢龍研究では、馮夢龍の“情教観”に基づき、彼が反封建禮教の文学家だという結論を与えている。もちろん、馮夢龍の“情教観”，特にその“愛情至上”論には、封建禮教と衝突するところがあるが、馮夢龍の生涯の経歴から見れば、彼は儒教から離れてはおらず、封建礼教は多かれ少なかれ彼に影響を与えている。

馮夢龍は“書香門第（読書人の家柄）”“理学名家”に生まれ、其の祖先はおそらく明初の有名な士人馮昌であると指摘されている¹¹⁾。彼は小さい頃から儒学の教育を受けていた。彼が特に専念して勉強したのは『春秋』である。彼の弟の馮夢熊は、『麟經指月』の序で、馮夢龍が『春秋』を勉強することについて、次のように述べている。“余兄猶龍，幼治春秋，胸中武庫，不減征南（私の兄の猶龍は，幼いころ春秋を勉強し，その知識は，征南にもまけないものでした）。”一生懸命に経学を勉強した結果，十数歳のころに秀才となることができた。ここでわかるように，馮夢龍に最初に影響を与えたのは儒教である。もちろん，その時，彼はまだ幼かったので，儒教を深く理解することができなかつただろうが，儒教の基本的な体系はすでに彼の頭の中に入っているはずである。

馮夢龍が成人になってから，三十代の半ばまでは李贄の思想の影響を受けて，飲む，打つ（賭博），遊ぶ（遊郭に足を運ぶ）の三拍子が揃った放蕩生活を送っていた。この時期，彼は、『牌經十三篇』，『笑府』，『広笑府』，『掛枝兒』，『山歌』などの娯楽用の本を出版している。彼は「広笑府・叙」において，中国で尊崇された賢明な皇帝，君子などをすべて揶揄し，儒

10) 許自昌『樗斎漫録』巻6。

11) 陸樹仑（『馮夢龍研究』復旦大学出版社 1987年9月 p 9。）

教、道教、仏教も痛烈に批判した。この叙は概ね白話で書かれ、ユーモアな調子である。例えば、“我笑那湯与武，你奪天子，他道是没有個傍人兒覷，覷破了這意思兒也不過是個十字街頭小經紀。……。我笑那李老聃五千言的道德，我笑那釈迦佛五千卷的文字，……。又笑那孔子的老頭兒，你絮叨叨說什麼道学文書，也平白地把好些活人都弄死（私は湯帝と武帝を笑い，貴方たちは天子の席を奪い，だれも見えてないのかと思っているだろう。貴方たちの行為を見通したら，ただ街で行なわれているペテンにすぎない。……。私は李老聃の五千言の道德經，釈迦の五千卷の經書を笑い，……。私はまた孔子のことも笑う。おまえがくどくどと言っていたことで，なんの理由もなくたくさんの人を殺してしまった）。”馮夢龍のこの言い回しは，余りにも過激であるのは，明末の奇をてらった，刺激を求める風潮に乗ったためかもしれない。たしかに，馮夢龍が完全に儒学とは決別したとも感じられるが，彼が三十代の後半，明給事中侯震豚の三人の息子と一緒に西堂で勉強することを通して，また封建社会の正統思想に回帰したようにも思われる。

馮夢龍は『侯雍瞻「西堂初稿」序』に当時彼らが一緒に西堂で勉強することについて次のように書いている。“往予与三瞻讀書西堂也，……。因憶西堂讀書時，嚠城名士卷帙過從，固無虛日。即黃門先生猶未謁選，時共臥起一室（昔私は三瞻と西堂で勉強したことがある。……。その時，嚠城の名士の文書をたくさんを読み，一日も無駄に過ごしたことがない。黃門先生はまだ官職に任命されておらず，時々私たちと同じ部屋と一緒に生活していた）。”この三瞻とは，侯震豚の息子侯峒曾（字は豫瞻），侯岷曾（字は梁瞻）と侯岐曾（字は雍瞻）の三人のことを指している。黃門先生は侯震豚のことである。侯氏父子はみな愛国心の強い人であるので，彼らの思想はきっと西堂での勉強会を通して馮夢龍に影響を与えたはずである。

その後，馮夢龍は四十一歳の頃，麻城へ行って，そこで麻城の名士と『春秋』を勉強する会を作った。彼は麻城へ行ったとき，自分書いた『麟經指月』の原稿を持参し，皆と一緒に検討した。麻城は『春秋』研究において大変有名であった。光緒三年に出版された『麻城県志』の卷四十「雜記」には次のように書かれてある。“明代邑人捷春秋闡者多以「麟經」顯。外省有不遠千里来麻就益者（明代には，麻城の人は科挙の試験で「麟經」で合格した人が多い。外省の遠いところから麻城へやってきて，勉強する人も少なくなかった）。”梅之煥の『叙麟經指月』によれば，馮夢龍が麻城へ行く理由は，“赴田公子之約”，すなわち馮夢龍が田公子に招かれたからであるとしている。馮夢龍が幼い頃から『春秋』を勉強し，『春秋』の学問で有名な麻城の人に招かれていたことは，馮夢龍が『春秋』に造詣が深い，有名であるからであろう。

馮夢龍は一生涯，科挙試験をあきらめず，いつか『春秋』の勉強を通して出世しようと思

っていた。彼は1630年（五十七歳）の時、鎮江丹徒の訓導になり、在任期間中、また科挙試験用の本『四書指月』を編纂した。訓導の仕事が終わり、彼は六十一歳の時寿寧の県知事になった。寿寧は大変辺鄙な場所である。馮夢龍が在任期間に作った『寿寧待志』には、寿寧のことを次のように書いている。“寿邑山險而偏，水狹而迅。人感其氣以生故性悍而量窄，雖錐刀之細骨肉至戚死不相讓。不知法律，以氣相食凌弱蔑寡，習為固然¹²⁾（寿寧は山が険しくて辺鄙であり，川は狭くて水流が激しい。寿寧の人々は其の自然の影響で，気性が荒く度胸が狭い，たとえ僅かの利益のために死んでも譲らない。法律を知らず，弱いものを苛めることは当然なことと思っている）。”このような状況から判断すれば，寿寧の人々は教育をあまり受けてないことが考えられる。馮夢龍が着任した当時，寿寧県には“学校雖設，読書者少。自設県至今，科第斬然。經書而外典籍寥寥。書買亦絶無至者¹³⁾（学校があるものの，勉強する人は少ない。県設立以来，いままで科挙合格者は一人もいない。經書などの典籍もほとんどがない。本の販売者もここに来ない）”という有様だった。そこで，馮夢龍は自分が“立月課，且頒四書指月親為講解¹⁴⁾（月課を作り，其の上『四書指月』を学生に配って，自ら講義をする）”に至った。その結果，“士欣欣漸有進取之志¹⁵⁾（士は喜んでだんだん進取の志を持つようになった）”のである。

馮夢龍は寿寧での在任中，科挙試験の教育に力を入れただけでなく，彼はまた“孝子”，“節婦”を表彰することにも力を入れた。『寿寧待志』の巻下「坊表」によれば，寿寧にはそもそも“状元”“登科”“貞節”という三つの“牌坊”があった。馮夢龍が着任した時，その三つの“牌坊”はすでに壊れていた。馮夢龍が在任中，その三つの“牌坊”を新たに作り直した。『寿寧待志』では四人の節婦に言及している。彼女たちはいずれも若い頃夫が亡くなり，その後再婚しなかった。例えば，呉氏は十八歳の時結婚し，結婚後わずか数ヶ月夫を亡くした。李氏が結婚したのは十九歳の時であり，五年後に夫が亡くなった。葉氏は十八歳で結婚し，結婚一ヶ月後に夫を亡くした。李氏（前述の李氏とは異なる）は二十四歳の時，夫を亡くした。『寿寧待志』では，彼女たちの夫婦生活が幸せであったかどうかについては一切触れていない。馮夢龍が注目しているのは彼女たちが再婚せず，“従一而終”を貫いた事実である。

以上の分析から分かるように，馮夢龍が幼少の頃に勉強した儒学は，彼の行動に影響を及ぼしている。『三言』を編集する際も，儒教的価値基準が題材選定の基準の一つとなったと

12) 馮夢龍「風俗」(『寿寧待志』「巻上」上海古籍出版社 1993年6月 p 93。)

13) 馮夢龍「風俗」(『寿寧待志』「巻上」上海古籍出版社 1993年6月 p 95。)

14) 馮夢龍「風俗」(『寿寧待志』「巻上」上海古籍出版社 1993年6月 p 96。)

15) 馮夢龍「風俗」(『寿寧待志』「巻上」上海古籍出版社 1993年6月 p 96。)

思われる。

六. 結び

馮夢龍は少年時代には儒学を拠り所にした価値観を有し、青年時代では、明末の王陽明哲学思潮の影響を受けて、自分なりの儒教に背を向けた価値観を作り上げた。その後、二種類の価値観は同等に彼を支配した。彼は一時、放蕩不羈な生活を送っていたが、完全に儒教から離れた訳ではない。三十代で出逢った“西堂読書”なる文献は、彼を再び正道に彼を回帰させた。“西堂読書”，及び麻城へ行った後，“放浪忘形骸”，“逍遙艷冶場，遊戲煙花里”な馮夢龍の姿は次第に影を潜めた。それでも、彼が反儒教的思想を完全に捨てたという訳でもない。彼が“西堂読書”に出合った直後も、袁無涯，李贄の弟子楊定見と一緒に李贄が評した『水滸伝』を校正，出版することに参加した。また，この時期，沈徳符の家で『金瓶梅』を見て，“見之惊喜，懲愚書坊以重価購刻（それを見て大変喜び，高い値段で購入して，出版するように書坊に提案した）。”彼は四十代から六十代までの間に出版した本の中では、『麟經指月』，『春秋衡庫』のような儒学の参考書や『古今笑』のような娯楽本，『情史』のような“情”を強調する文献もある。これらの書物から，馮夢龍が儒教的，反儒教的側面を併せ持っていたことは間違いない。

馮夢龍が『三言』を編集する際，封建禮教に背く“愛情至上”主義，そして封建禮教と一致している価値観の両方が混在していることが分かる。“愛情至上”主義は，彼の中ではやや優勢な地位を占めている。馮夢龍はまずすべての“貞節”を守る行為を無条件に受容し，その行為を賞賛した。しかし，彼は“貞節”を守ってない行為をすべて批判しているわけではない。“貞節”は守らずとも男女の間に深い愛情がある場合，ある種の状況でそれをも賛美している。それは，積極的に自分の愛情を追い求める行為であり，相思相愛の姿である。馮夢龍が抱いた“愛情至上”主義とは，二人が相思相愛であるということを基礎として，愛情のために相手に尽くすこと，そして二人が結ばれることに愛情の目的がないことである。この場合は，馮夢龍は彼らの愛情だけに注目し，彼らの反禮教的行為には言及していない。そうではない場合，彼が強調しているのはやはり禮教である。例えば，蔡瑞虹は朱源と結婚した後，二人はお互いに愛しているが，実は蔡瑞虹が心の中で望んでいたのは，朱源を通して自分の家族の仇を討つことである。彼女と朱源の愛情は純粋な愛ではないため，馮夢龍は彼女が“貞節”を守ることを賞賛したのである。

馮夢龍の思想を総体的に見れば，反封建禮教的側面もあれば，封建禮教を守る面もある。彼の男女平等，“愛情至上”，女性の自我意識を肯定する面にのみ焦点をあて，彼を“反封建”的文学家と名づけるのは正当ではないだろう。彼の思想には，進歩的な観念と封建禮教とが

ほぼ同時に存在している。馮夢龍はこの二つの観念ともに大切にしており、彼の行動もこの二つの観念の影響が見られる。小論では、『三言』における女性の物語を中心にして、馮夢龍が『三言』を編集する基準を考察し、彼の思想の両面性を分析した。彼と同じ時代のほかの士人たちは彼と同じように、思想には両面性があるかどうかについては今後のテーマとしたい。

参考文献

小川陽 『三言二拍本事論考集成』（新典社 1981年11月）

馮夢龍 『三言』（岳麓書社 1992年1月）